

	<p>2017年 7月15日 第121号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 <a href="http://mizumidori2.eco.coocan.jp">http://mizumidori2.eco.coocan.jp</a> E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a> 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	---

## 観察会 バッタ広場の「虫しらべ」

- 日時：8月26日(土) 10時～11時30分 雨の場合は9月2日(土) はっきりしないときは 赤塚公園サービスセンター(3938-5715)へ
- 集合場所：板橋美術館前
- 持ってくるもの：ポリ袋、飲み物、帽子、草むらに入る服装(長袖、長ズボンがよい)、蚊もいるので必要なら虫よけ薬。あれば昆虫網や虫かご、図鑑
- 申し込み・問い合わせ：いたばし水と緑の会事務局 瀬田：3969-7124
- 定員20名程度 ・小学3年生以下の方は保護者ご同伴ください。
- 参加費：50円(保険料)

主催：いたばし水と緑の会・赤塚公園サービスセンター

赤塚城址にあるバッタ広場はバッタやカマキリ、キリギリスなど、生き物たちのための草原です。ここにどんな生き物がいるか、毎年調べています。みんなで生き物をそとつかまえて、ポリ袋などに入れ、それをみんなで観察して、種類を調べてから放します。暑い夏は虫たちが最高に元気になる季節、生き物の世界に興味のある方、ご参加下さい。



## 沖田さんの跡地が公園になる

赤塚公園城址地区の西にあった大きな敷地の農家だった沖田萬司さんが亡くなり、気がついたら更地になっていました。近い将来公園になります。この場所が公園になるのは楽しみなことです。4月15日、私たちは跡地を見学、全員が「手を入れずに今のままがいい」という感想を持ちました。自然がいっぱいの公園になってほしいと願い、東京都東部公園緑地事務所に要望書を出しました。

沖田さんのお宅には大きな木が茂って、東京とは思えない森の中(?)にあって、夏でも涼しいところでした。2005年9月26日に赤塚の雑木林と農業との関わりをお聞きしたいと沖田萬司さん宅におじゃまし(釣巻、泉、坂本)、小学校の同級生だった本橋金藏さんにも来ていただきました。お二人とも昭和8年生まれです。本橋さんは大門の区画整理前の風景を記録されていて、その貴重な写真もいただきました。このときのお話と写真は、会報51号(2005年11月号)、52号(2006年1月号)に掲載しました。会のホームページで会報バックナンバーでも見られますが、次号に再度掲載する予定です。

そのとき114年前に建てられたと聞いた家はもうありません。落ち葉を積んで堆肥をつくり、その堆肥には毎年カブトムシが来て産卵し、孫が幼虫を学校に持って行ったという話をされました。

写真は敷地の南側から撮った写真です。生産緑地の看板があってももにサツマイモ畑でした。今、城址公園の南側は住宅地で普通の道路が通っていますが、20年前は畑で、道も農道のような細い道でした。赤塚の農の風景がなくなってきて、時代の流れを感じます。農家の跡地が公園になるにあたって、昔の農家の風景が感じられる公園になってほしいと願っています(坂本郁子)。



手前は畑(主にサツマイモ)、奥の森のあたりに家があった。家の周りに防風林としてカシを植えたそうです。

# 城北中央公園トンボ池の10年

城北公園・四季の会（本文中は“四季の会”と略） 新井康之



城北中央公園（板橋区桜川1丁目・練馬区氷川台1丁目）のトンボ池はコンクリート造りの小さな池です。公園の一角に設置されて10年経ちました。人工池における10年間の生き物の変化とドジョウが支配する現状について報告します。

## 1 城北中央公園トンボ池

城北中央公園のトンボ池は、公園の北の端に位置しています。城北中央公園は、サービスセンターや競技場、野球場Aのある中心部が小高い台地になっています。公園北側は6mほどの段差を下って縁に至ります。トンボ池はその段差中間の直径25mほどの広場にあり（図左上、左下）。

城北中央公園のトンボ池は南北9m、東西5mほどの楕円形の池です（次頁写真1）。今から10年ほど前の2006年頃に作られました。コンクリート造り、お皿のような窪みで水溜りと言ってもおかしくない人工池です。周囲は石組みになっています。給水は雨水と手押しポンプの井戸水が頼り（写真2）。池の南端にポンプからの給水口（直径12cm）、北端にオーバーフローの排水枳があります。





**写真1 トンボ池全景**  
(2015年2月19日撮影)  
トンボ池はコンクリート造り、9m×5mの楕円型の池です。画面左側が御嶽神社で社屋の屋根が見えます。植込みはエノキやクヌギ、コナラ、イヌシデの落葉樹です。撮影した冬場は日差しがありませんが、夏は少し薄暗い環境です。右側3mほどの崖の上は通路を挟んで野球場、その手前の樹木はトウネズミモチです。中央の階段先に手押しポンプの井戸があります。



**写真2 池へ給水できる手押しポンプ**

トンボ池南側の高台に井戸があります。手押しポンプで水が汲めてその排水が池まで地下の管を伝って下り、池に流れ込みます。ポンプ一押しで0.4リッター、100回押しして水面が約1mm上昇する計算です。写真右側フェンス内には動力で水を汲み上げるポンプとタンクがあります。普段は野球場のスプリンクラー用、災害時は飲料以外の給水源になります。

この広場は植生や履歴の異なる林の境界に当たります。南東には御嶽神社があり、ここは鎮守の森として昔からの植栽が残っています。クヌギ、コナラ、イヌシデ、エノキといった関東の雑木林の樹木です。反対の西北側は1970年以降に植栽された樹木。落葉樹の大木はほとんどケヤキ、プラタナスで雑木林の樹木を見ることはまれです。

池周囲への立入りは禁止していますが、ロープの柵だけです。水際まで誰でも入ることは可能です。実際オタマジャクシの時期には採集している親子連れをよく見かけます。

### コラム1 城北中央公園について

城北中央公園は赤塚公園と同じ都立公園で、板橋区と練馬区にまたがり、石神井川沿いにあります。この公園は自然観察をする方々からは、自然度の低い公園として知られています。ここで観察会を行なっている“四季の会”のメンバーとして残念なことです。否定できない事実です。その理由はこの公園の成立ちにあります。

城北中央公園は今年開園60周年です。(当初は都立上板橋公園と呼ばれました)しかし、その後約15年間立教大学に運動施設として貸与したため、一般に開放して城北中央公園として開園したのは1970年のことです。1970年以降も立教大学時代を踏襲してスポーツ公園として整備されました。競技施設間の樹木もせいぜい40年ほどの歴史ということになります。



国土地理院ホームページでは過去の空中写真を見ることができます(戦後の土地利用の変化を見るのに重宝します)。1975年1月撮影の画像(写真3)では、御嶽神社の一带だけ緑があり、他の地域はむき出しの地面が見えます。城北中央公園の緑の歴史を裏付ける資料です。

### 写真3 1975年1月 城北中央公園の空中写真

この画像は、国土地理院ホームページから空中写真をダウンロードし画像処理したものです。1970年の開園後5年近く経ちますが野球場や競技場周囲の植栽は進んでいないように見えます。1月の撮影なので落葉時期ということもありますが、御嶽神社の一带だけ樹木が見えます。ヒマラヤスギは早く植えられたようです。

### 写真4 “四季の会” 掲示板

トンボ池の近くに会の掲示板があります。公園内の自然を画像とその解説で来園者に伝えています。1, 2ヶ月ごとに展示の更新を行っています。



結果的に自然度の高い御嶽神社周辺が私共“四季の会”の観察ポイントになりました。トンボ池という水場のおかげで野鳥なども集まります。今では公園ボランティアとして池周辺の整備も担うことになり、“四季の会”の活動拠点となっています。一角には会の掲示板(写真4)があり、園内の自然に関する情報を展示しています。

(トンボ池が出来てから10年の間に観察した生き物については次号で紹介します)

## 戦中戦後の田舎生活のこと(2)

### 自然の恵み・食べもののこと

米を作っていたが、主な収入源であるから自家用には最低量しか保有せず、物日以外は2割位の押し麦が入ったご飯であった。暮れに搗いたお餅も親類縁者に上げ、残りを正月三日まで白い餅を食べ、以降は粳の屑米を挽いた粉で作った新子餅の雑煮だったが、この餅は上顎に引っついて好きではなかった。この新子餅は乾燥したアラレにし保存食にもした。

ご飯のほかに大麦は、自家生産の大豆と合わせて味噌作りにも使用し、小麦も沢山造ったので粉にして饅頭をよく食べた。山梨県で有名なホウトウもニボウトウと言って寒い季節の夕食には定番であったが、夏には冷やし饅頭となって昼食にも食べた。冷やし饅頭の付け汁には「冷や汁」が供されたが、たっぷりの炒り胡麻（白胡麻だった）を摺り鉢で摺り、薄切りのキュウリと味噌を加えてよく摺り、冷たい井戸水で適宜薄めたもの。冷や汁で素麺を食べることは、拙宅では食欲の衰えた暑い夏には何回か食卓に上がるおすすめレシピだ。当時キュウリは黄色味を帯びる位まで育った太いものを探り、皮を剥き二つ割りにして種を取って食べた、現在のように若い実を食べるなんてことはなかった。

キュウリやナスなどは糠漬けでも食べ、さらに古漬けを味噌付けにして食べたが、弁当のおかず？に梅干し（戦時中の日の丸弁当）と並んでナス漬けの味噌が染みたご飯は食欲をそそり、何もなかった当時の弁当のおかずのでは好きだった。野菜は色々作っていたから不自由しなかった。春先のセリとノビルは茹でて醤油や味噌和えたヌタなどで食べ、ヨモギは草餅でよく食べた。一度アカザやスベリヒユも試したことを覚えているが、そのほかの野草は食べていない。山はないのでタラの芽など山菜は縁がなかった。何年前かにクサギの若芽を食べると聞き試したが苦すぎて茹でただけでは喉を通らなかった、てんぷらならいけるのかもしれない。

サツマイモも作っていて、蒸かしイモをよく食したが、代用食としてではなく間食だった。柔らかく煮た芋を薄く切って干した乾燥芋はカマスに沢山入っていて、冬中の間食として子供が頼張った。この乾燥芋には煮ると透明感のある太白とか言った芋が一番だった。戦後量産の品種としてオキナワイモといった黄色で丸くて大きいサツマイモが現れたが、うまくなくて、たちまち消えてしまったようだ。

桑畑は見る影もなくなったが、初夏には桑の実がたくさん生って、甘い菓子などなかった当時は子供達が口の周りを紫に染めて食べる美味しいおやつだった。甘いものと言えばトウモロコシの収穫後の幹・茎には糖分があり、硬い皮を剥いてかじったり砕いて煮出して甘味料を作ったことがある。前栽畑のトマトは何時でも挽いで丸かじりする果物的なものだったので、或るときおらずで食べると聞き驚いたことがある。

動物性の食物としてはニシンの干物が配給されたが、品質も悪くてあまり好きではなかった。田圃の用水路で大きい笹に追い込んで採った小魚や川で釣った鮒や鯰や鰻も食膳に上り、タニシも剥き身を味噌で和えて食べたが、稲刈り直後の田圃に出来た足跡のへこみに集まっていた。タニシは壁土に塗りこめられても3年位生きているといわれる生命力が強く、乾いた田で越冬する生物だ。笹で捕った雑魚の中に形は鮒だが、体の一部がくすんだ緑色で尾っぽが赤や紫のきれいな小魚（朝鮮鮒と呼んだ）がいたが、図鑑などで見たことがないが、今どうしているのだろう。

戦後数年して現れたザリガニはカエルの肉で沢山釣り、尾っぽの肉を甘辛く煮て食べた。近く

にある幅5m位の入間川の支流、安藤川（当時はアクスイと呼び、後で知った）は夏だけ水深が2mあり、ここで日がな泳ぎ、釣り、蛍を追ったりして夏休みを過ごした。冬は浅くなった川底でシジミを採ったりした。秋に水田の水を落とす時、ドジョウが用水路の水たまりに集まり、土に潜って越冬するので、水溜まりの跡が湿っている間に手で掘り起こしてドジョウを捕った。秋にはイナゴを取って甘辛く煮、動物蛋白質補充の一助にしていた。蛋白質といえば、大豆を田の周りなどに植えていて、味噌醤油に使うほか、水に浸したものを摺って味噌汁に入れ呉汁としてよく食べたが、豆腐や油揚げへの加工は近くに店がなくてめったに食べなかった。

小豆や大豆は刈り取って乾かしてから、むしろの上に並べクルリ棒を回転して叩き、豆を収穫した。

山羊や兎や鶏も飼っていて、山羊の乳をのみ卵は時折卵掛けご飯や野菜の卵とじで食し、溜まると売っていた（卵買いが巡回）子供が世話をする兎も食べ毛皮は上着の背中に張って暖を取る一助とした。鶏は卵を産まなくなると潰し（殺し）肉になった。鶏や兎を殺すところは子供にはむごく見ないようにしたが、肉食生活の世には欠かせない役目なのだ。

## 燃料のこと

養蚕で使う硬炭以外燃料は自給であり、稲や麦のわらは勿論、ナスやトウモロコシ、胡麻、豆類の茎などすべて燃料であった。戦後何年かしてダルマ型のモミ殻専用の燃焼竈が普及したが、これは燃やすのにずっと付いていなくてもよいので、藁などを燃やすのに比べて非常に楽だった。裏の屋敷林に竹や雑木が植えてあり、杉の木を芯にして数m高さの藁ボッチを何個も作って稲藁を保管し、牛の飼餌や敷き藁、そして燃料にした。稲架用のたけも古くなると燃料に化け、蚕に枝ごと給餌した桑の枝も当然、古木となった桑の株も燃料だが、燃やしやすくするために斧で割るのが大変作業だった。ナスの茎を燃やすときは「借金ナス（済す＝返す）借金ナス」と唱えるんだと母親が呟いていたのを思い出す。

冬は藁で縄を綯ったり蓆を織ったり、俵やサン俵を造ったりする仕事はあったが、現金収入のために若い男は働きに出た（通勤型）。10歳上の長兄が私と妹2人の学費を稼ぎだしてくれていたと思うと、この文を記すに当たり改めて感謝の気持ちが湧いた。（猪鼻 昭二）

## いきもので賑わう赤塚城址だけど

バッタ広場の上空を茶色の猛禽類がカラスを猛然と追いかけているのを2回見ました。どこかに巣があるようです。きれいなチョウトンボも飛んでいました

6月24日のバッタ広場の虫調べでは、昆虫網を持って公園に来ていた親子3組も参加。虫取りがうまい子ども達は、チョウやチョウの幼虫、卵を持ったカナヘビも捕まえて持って帰っちゃった！！

城址には、生き物を探しに来る人も、持ち去る人も出てきた。虫を探して木を剥いてしまう人も（写真右）。

うれしいけれど、ハラハラしながら、見守っています。



# 活動のお知らせ

運営委員会：7月22日（土）12：30～13：30

8月26日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先：坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：9月16日（土）12：30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田（3969-7124）まで

## 活動予定いろいろ

1 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、大仏下ミニトンボ池、バッタ広場）の環境整備と観察。

集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）（予定を変更する場合があります）

7月22日（土）10：00～11：30 バッタ広場の手入れ（ササ刈りと外来植物抜き取り）

8月19日（土）10：00～11：30 バッタ広場の手入れ（ササ刈りと外来植物抜き取り）

9月16日（土）10：00～11：30 未定

2 バッタ広場の観察（虫調べ）（どなたでも参加できます）（表紙でも紹介しています）

8月26日（土）10：00～11：30 トンボ池集合

雨天の場合は9月2日（土）

生き物をそとつかまえてポリ袋などに入れ、みんなで観察して、種類を調べてから放します。

持ってくるもの：ポリ袋、飲み物、帽子、草むらに入る服装（長袖、長ズボンがよい）、必要なら虫よけ薬。あれば昆虫網や虫かご、図鑑（なくてもよい）

参加費：50円（保険料）

3 日暮台公園樹林地の観察プラスα（樹林地内の推移と林縁植物を観察、ゴミ拾い等）

8月5日（土）、9月2日（土）いずれも10：00～11：30 日暮台公園前集合

（日程変更する場合があります 連絡は坂本 090-4618-1295まで）

## ●ビオトープ管理のボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの管理作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。